

南恩加島ものがたり

～南恩加島の歴史を振り返ろう～

南恩加島小学校が創立90周年になりますが、南恩加島の歴史は何百年も前から始まります。この機会に、南恩加島の歴史をQ&A方式で振り返ってみましょう。

なぜ「南恩加島」という地名になったの？

300年ほど前に、みち潮となると海に沈んでしまう低い土地に、村の人々は堤防を作り新田をひらくようになりました。200年ほど前には、「岡島嘉平次（おかじま かへいじ）」という人が、村の人とたちと一緒に千島や平尾に新田を開きました。わたしたちの町である「南恩加島」では、160年ほど前に、2代目、3代目の岡島嘉平次らによって新田がひらかれました。土地を開いた岡島嘉平次の「岡島」を「恩加島」と文字を変えて、この名をつけました。その土地の南の方を「南恩加島」とよぶようになりました。



明治22年ごろの土地のようす

昔はどんな土地だったの？

大正区の地域は、ほとんどが田畑と「アシ」という植物がたくさんはえている原っぱでした。校歌にある「♪あし原の昔から～♪」は、ここからきています。新田では、綿・麦・米が作られていました。その後、すいか・ねぎ・きゅうり・うりなどが作られ、南恩加島のすいかは、「新田すいか」として有名でした。

春のしおひがりや、秋のはぜつりのころになると、尻無川の甚兵衛の渡しのあたりに、たくさんの人が船に乗って遊びに来ていました。また、木津川の堤防には、たくさんの松が植えられていました。

南恩加島はどんなふうに変化したの？

明治の終わりから大正にかけて、泉尾や南恩加島に土地会社がつくられました。この会社は、田畑、道路、運河、工業用地などの区画を整理

しました。町が整備されていくと、木津川や尻無川、木津川運河に沿って、セメント・機械・化学肥料をつくる大きな工場ができました。このころになると船で外国と取引をすることも多くなってきました。工場がどんどん増え、働く人が多くなったので、初めての市営住宅が鶴町に作られました。遠くから働きに出かけてくる人も多くなりました。

南恩加島小学校はどんなふうになったの？

わたしたちの南恩加島小学校は、大正13年に「泉尾第一高等小学校」と「鶴町小学校」からわかれてできました。

校舎は、木造2階建てで10教室でした。校区は広く、今の小林小学校の近くまでありました。人口がどんどん増えていったので、次々に校舎を建てて教室を増やしていきました。それでも教室が足りなくなったので「港南小学校」と「大正小学校」が南恩加島小学校から分かれて作られました。



大きな台風の被害あったときの様子は？

昭和9年9月21日、大きな「室戸台風」が大阪を襲いました。この台風で大阪市の1/3の地域が水につかりました。5メートルもある高潮がおしよせた大正区は、すっぽりと水につかってしまいました。

子どもたちが登校するころ、風が急に強くなり、校舎が揺れ、古い木造校舎は倒れてしまいました。子どもたちも、けがをしたり亡くなったりしました。校舎の半分が壊れてしまい、高潮で机や本が流されてしまいました。水が引いた後も校舎に泥が残り、洗い流すのに7日間もかかりました。

昭和25年には、「ジェーン台風」が大阪を襲いました。南恩加島では、家の天井まで水につかったところがあり、学校へ大勢の人が避難してきました。昭和43年から大正運河の埋め立てが始まり、南恩加島でも、盛土工事が行われまし

た。1丁目や2丁目、5丁目は盛土をして、高く
地上げされました。昭和45年には木津川や尻
無川などに、大きな水門がつけられ、台風が来



た時に、この水門を閉じて、
高潮が海から来るのを防ぐよ
うになりました。

戦争のころの町の様子は？

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まり、
昭和19年頃から大阪の街も空襲が激しくなり
ました。空襲にそなえて防火用の水槽や、防空
壕がつくられました。火事が燃え広がらないよ
うに町のところどころに空き地をつくり、避難
場所にもなりました。今の南恩加島公園は、そ
の時に作られた空き地を公園につくりかえられ
たものです。

大正区は、7回の空襲を受けました。三軒
家、鶴町、船町、南恩加島などの町が焼けまし
た。南恩加島では、町の西半分が焼け野原にな
り、港南小
学校も焼け
てしまいま
した。



学童疎開はどのように行われたの？

昭和19年になると、空襲が激しくなり、子
どもたちを守るために「疎開」が始まりました。
南恩加島小学校では3年生以上の250人の子ど
もたちが集団疎開をすることになりました。昭
和19年9月19日の午後5時に「疎开学童壮行式」
が盛大に行われ、町中の人が見送ってください
ました。大運橋駅から市電に乗り、午後9時に
大阪駅発の臨時列車に乗り込みました。夜汽車
は岡山で夜明けを迎え、連絡船に乗り換え、ま
た汽車に乗って9月20日の午前9時42分に貞光
駅(徳島県)に着きました。

疎開先での生活も4カ
月を過ぎたころ、大きな
火事が起こりました。駆
けつけた人々は必死に子
どもたちを助けようとし



ましたが、逃げ出せた子どもは13人、16人は
帰らぬ人となりました。

戦後の町や学校の様子は？

昭和20年8月15日、長かった戦争が終わり
ました。人々は食べ物がなくて、遠くの農村
へ米やいもを「買い出し」に行きました。南恩
加島では、大運橋通商店街が焼けなかったので、
昭和21年ごろから、にぎやかになっていきま
した。

大正区では、鶴町・三軒家東・港南の小学校
が焼けました。南恩加島の町は西の方が焼けま
したが、小学校は焼けずに残りました。新しい
憲法がきめられ、学校の制度もかわりました。
小学校の6年間と中学校の3年間は義務教育と
なり、男女が一緒に勉強するようになりました。
児童数も少しずつ増えていきました。

大正区や南恩加島は戦後どのように発展したの？

昭和23年ごろから戦争で焼けた町の作り直
しの工事が始まり、住宅や工場が建ちはじめ、
町に活気がもどってきました。大正区では、鉄
鋼業を中心に工場も大きくなり、生産高も増え
ていきました。戦争中は止まっていた市バスや
市電が船町や鶴町まで走るようになりました。

しかし、工場から出る煙の中には、人の体に
悪いものや、黒い粉が入っていて、洗濯物を汚
したり、喘息の人が増えたりするなど、生活や
体に悪い影響が出はじめました。

昭和46年には、地下鉄工事で掘った土を使っ
て千島公園に「昭和山」がつけられました。ま
た自動車の交通量が多くなり、大正通りの道幅
を広げる工事が行われました。南恩加島では、
住宅や店・寺・郵便局などを他の場所にうつし
てから道幅を広げました。大正通りが広くなり
車の通行量が増えたので、児童の安全を守ろう
と、学校の横に歩道橋がつけられました。

昭和50年代半ばに
なると、工場の煙の
被害も少なくなりま
した。



16地蔵モニュメントにまつわるお話

本校の90年の歴史の中で、大きな出来事であった疎開先での悲しい事故。亡くなられた16人の児童への想いの詰まった校庭の「モニュメント」。このモニュメントの制作に深く関わられた白川洋二先生に、当時の学校の様子やモニュメント作成の思い出をお聞きました。

『先輩の思いをここに』

16地蔵モニュメント作成を「平和」の誓いに

白川 洋二(元大阪市立南恩加島小学校教諭)

1.子どもたちのつぶやきから

2000年に4年生を担任した時、「先生、16地蔵って徳島にあるんやろ。16人は南恩加島の先輩やろ。そやのに、なんで16地蔵が徳島にあって、うちの学校には何もないのん」……子どもたちのつぶやきだった。

子どもたちの素直な疑問につき動かされるように、「今ならまだ16人と一緒に疎開し、難を逃れた人がいるはずだ。記憶がまだ鮮明なうちに語り部を探そう」と取り組みを始めた。地域の方々の協力をいただき、16人と同じく真光寺に疎開し、難を逃れた方が、快く子どもたちの前でつらいお話をしてくださった。「何で隣に寝ていた友達を起こしてやれなかったんや」と、長い間自分を責め、その思いを押し込めてこられたつらい気持ちを語ってくださった。しかし、鎮魂のモニュメントが完成に近づくにつれ、学校から、子どもたちの前から遠ざかっていかれた。深いところの傷を広げてしまったのかという思いが今も心に悔いを残している。記憶の中に封印したものを引きずり出すことのいたみを理解しなければならないと、強く思わされた。

2.『先輩の思いをここに』モニュメント作り

2002年4月、6年生になった子どもたちと「16地蔵のモニュメントを作ろう」という取り組みをすることになり、実行委員会を作った。5月には全校集会で協力を呼びかけた。同時に地域やPTAにも協力をお願いした。

地域のお店に募金箱を置かせていただいたり、不要品の回収を始めた。この取り組みの中で、子どもたちは多くの人たちとつながり、新たな人との出会いを果たし、人々の温かさにも触れることが出来た。

モニュメントを納める建造物作成に関わっては、PTAの役員でもあり、地域で工務店を経営している方が、「私もこの卒業生です。心に残るものを作ります」と材料費だけで引き受けてくださり、仕事の合間をぬって作業を進められた。

モニュメントの本体をどんなものにするかを相談していく中で、子どものデザインをもとに作ろうと考えてきたが、それがとてつもなく費用のかかることであると知らされた。そのことを教えてくださった東大阪の上田合金の上田富雄さんが、「鎮魂の鐘」として古代の銅鐸を子どもたちに作らせてはどうかと薦めてくださった。公教育の場で、地蔵尊のような宗教色のあるものは避けなければと考えていた矢先であり、古代に先祖の魂を静めるために作られた銅鐸ならと決めた。この上田社長との出会いも大きな収穫であり、上田合金の工場長が南恩加島国民学校で16人と同級生だということもわかった。工場長は縁故疎開されており、貞光には行かれていないが、このことでも、ひとつの取り組みが人と人を結びつける力を持つということを実感させられた。

3.貞光の人たちの思い

その年の秋、職員で貞光小学校を訪問し、真光寺を訪問した。貞光小学校では毎年1月29日には、保育所・幼稚園・小学校の全学年でおまいりをしていると聞かされた。そして貞光小学校の児童会が中心となり、募金活動にも取り組んでくれた。

真光寺では長い間、16地蔵尊を守ってこられた供養会の方々もおられ、「貞光でも戦争に対しての風化が進んでいるんですよ」と話されたことが印象に残っている。寺の本堂の再建の前に16地蔵尊を建立し、毎年欠かさず法要を営んでこられた人々の、言葉少ない語りを聞いて、申し訳なさやありがたさがしみてきた。1月29日は不思議と貞光の町には冷たい雨や雪が降るそうで、町の人々はそれを「16地蔵さんの涙雨」と呼んでいると聞かされた。この席で、貞光の盆踊り「繰上げ音頭」の中の「16地蔵由来記」を参加者が踊ってくださった。16地蔵が盆踊りとして踊られ、供養されている事実には言葉もなかった。町の人々の16人の子どもたちへの哀悼の思いの深さを知らされた思いだった。

ご住職に教えていただき、焼けた本堂のあたりにあったと思われる小石を、16個拾って学校に持ち帰った。その石は今、モニュメントの台座の上にはめ込まれている。

4.16地蔵さんのうれし涙

2003年の1月29日モニュメント除幕式当日、前夜からの雪はやんだものの、朝から氷点下の寒さ。早めに登校してきた6年生は、モニュメントの周りの清掃、水たまりへの砂いれ、解けた雪が凍った来賓用の椅子への雑巾がけと、かじかむ手に息を吹きかけながら黙々と働いた。くじけそうになった。あきらめかけた。でも、いろいろな人の温かさに支えられ、今日があることを子どもたちと一緒に考えていた。

除幕式では司会進行から案内役まで、子どもたちの手で進めた。はじめの言葉「この一年いろいろな人に支えられ、モニュメントを作ることができました。このモニュメントは先輩の悲しさや悔しさを忘れず、平和を誓う記念碑です」に始まり、「先輩たちの悔しさ悲しさ、その思いを胸に刻み、平和を大切に、悲しい戦争のない世の中を作っていくことを誓います」と呼びかけた。貞光小学校にも贈った銅鐸、徳島の「鎮魂の鐘」と時を同じくして、実行委員会の手で16回鳴らし参加者全員黙祷をささげた。

モニュメントの中には「先輩たちは卒業してへんのやろ。卒業証書作って卒業式をしたらあかんかな」という子ども

の発案で出来上がった卒業証書も収められている。またモニュメントの上には子どもたちが陶板で作った「先輩の思いをここに」の額がはめられ、側面には16人の写真を元に、子どもたちが16人の顔を銅版レリーフで彫ったものをはめている。

記念式典が講堂で開かれ、16人の卒業式も行った。講演された原田一美さんは、「私は講演するというよりあなたたちに会いたくて来ました。私はすばらしい感動をもらいました。これで16地蔵さんもふるさとに帰れました。昨日からの雪は16地蔵さんのうれし涙です。これで16地蔵さんもやっと成仏できました。ありがとう」と締めくくられた。

記念式の後、参加された遺族の方が「今日来ることができなかった長兄に、卒業証書をみせてやりたいがもらえないか」という申し出があった。すぐさまコピーをしてお渡ししたが、卒業証書が遺族にとって、かけがえのないものであったことを知らされた。

全てが終わった後、常に寡黙な子が「うちらすごいことしてんな」とボソッとつぶやき、作文に「考え方は違っても、最後には平和というたった二文字が、どんなに尊いものかということを、先輩たちが私たちに教えてくれたんだと思います」と書いてくれた。

5.「間に合ったんだ」

子どもたちが卒業した2003年の5月、除幕式の時には、あまりの寒さに出席できなかった16人のうちの一人のお母さんとお姉さん、弟さん二人が学校に見えられた。お姉さんは「自分は6年生で、1月29日の前日に貞光で弟と別れたばかりだったんですよ」と悲しそうに話された。お母さんは銅鐸の鐘を鳴らし、杖をつきながらはめ込まれた石を優しくなで、息子の顔の銅版レリーフをいとおしそうにいつまでも見ておられた。夕闇の中、シルエットになったその姿は、今も胸の詰まるような光景だった。お母さんは91歳と聞かされた。その祈るような姿に、子どもたちの取り組みは遅かったのではなく「間に合ったんだ」と気づかされた。

6.16地蔵さんへの修学旅行

卒業した子どもたちが「私ら本物の16地蔵さん見たことない。同窓会でもいいからいつべん連れて行って」と卒業前に言っていた。そのことが心に引っかかっており、いつかは子どもたちを貞光へと考え、取り組みを進めてきた。そして2006年にそれは実現した。到着した貞光では「ようこそ南恩加島小学校のみなさん」の横断幕で、大勢の町の人が出迎えてくれた。町を歩くと同じ言葉で小旗を作り、家の軒先に挿したり、道に出て小旗を振って出迎えてくださった。貞光寺では16地蔵さんにおまいりし、繰上げ音頭を子どもたちが踊りで奉納した。長い間16地蔵さんを守ってこられた方たちは、涙を流し「生きているうちに南恩加島の子に会えるとは思わなかった」と喜んでくださった。

7.『もの言わぬ語り部』

子どもたちのつぶやきから活動が始まり、モニュメントが生まれ、修学旅行が実現した。その中で子どもたちは多くの人と出会い、かけがえのない体験をした。今もモニュメントは校門を入ると正面に見える位置にあり、静かに千羽鶴がゆれている。

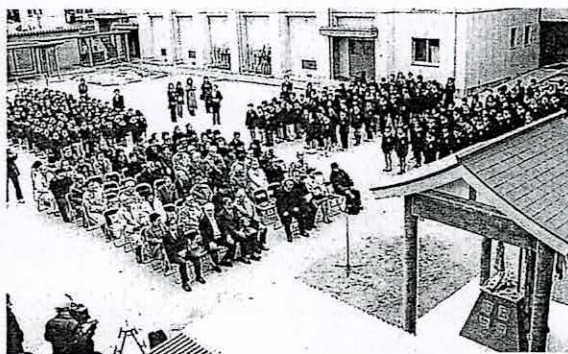
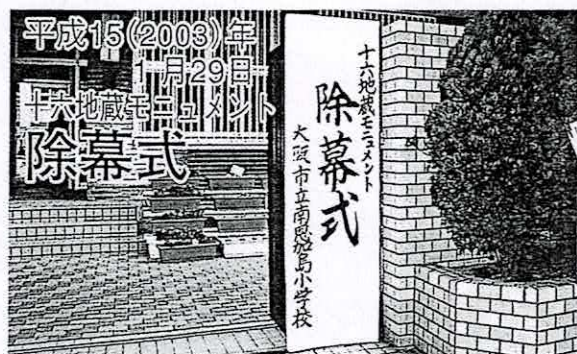
1945年2月10日、南恩加島国民学校で16人の校葬がもたれた。その当時の校長の弔意文の原稿が残されていた。朱で何度も推敲したあとがあり、戦争の末期、大阪大空襲が始まるかという時代背景の中で、素直に哀悼の意を書けない、教師としての悔しさ、苦悩が行間に見て取れる。また疎開先で子どもを死なせたことに対する容赦のない非難が浴びせられたであろうことも容易に想像がつく。その後、職を辞した先輩職員もいたと聞く。そんな先輩職員の思い。責め続けた不条理なものへの怒り。今も深いところで無念の思いを抱える残された先輩の思い。子どもたちが作ったモニュメントを、いつまでも愛おしそうに見つめる人々の目。それを伝えていくことが重要な取り組みだと考えている。

モニュメントという形あるものがそこにあることで、これからの子どもたちが常に16人の先輩のこと、平和のことを考える大きな力となるだろう。学校という場合は、毎年、子どもたちが入れ替わる。それはその保護者も入れ替わることを意味し、モニュメントについての説明責任を、学校は負うことになる。

私が退職の年のある日、新しく入った1年生がモニュメントの前にしゃがみこみ「なにこれ」と話していた。そこにその子たちの担任の若い教師がきて早速質問されていた。どう話すのだろうと思っていたら、どこまでわかるかは別にして丁寧に説明していた。そうした取り組みが繰り返されることが、活動を継続していくことだと気づかされた。またある日、私のクラスの女の子が自分の新1年生の弟をモニュメントの前に連れてきて、一生懸命に説明をしている姿を見かけた。このように連綿と16人の先輩たちのことが話し継がれていくのだと実感させられた。

子どもたちの一歩を踏み出す勇気に支えられ、取り組みは実現した。

退職し7年が過ぎようとしている。今、改めて気づかされることは、あの子達が残してくれたものは『もの言わぬ語り部』だったということである。



十六地蔵尊

(真光寺 徳島県美馬郡つるぎ町貞光字野口 58)

<歴史>

昭和 19 年 9 月 20 日

集団疎開で大阪市大正区 南恩加島国民学校 第 3 学年男子児童 29 人、真光寺を寄宿舍とする。

昭和 20 年 1 月 29 日 午後 9 時

真光寺本堂から出火、16 人男子生徒焼死。(出火原因裏便所の漏電)

2 月、貞光学校葬、南恩加島学校葬。

昭和 20 年 8 月

十六地蔵尊像 完成予定

昭和 21 年 5 月 29 日

十六地蔵尊像 開眼入魂式。以来、地元子供会が掃除、お花の供養を継承。毎年 1 月 29 日には地元の方と共に住職の読経供養を継承。

昭和 48 年 11 月 30 日

繰り上げ音頭 「十六地蔵由来記」発行 著作：枝川利一氏

昭和 49 年 1 月 29 日

30 年忌法要実施。第 1 回目の貞光町公式行事とする。

以来、5 年毎には規模を広げての供養を実施。昭和 54 年 (35 年忌法要) 昭和 59 年 (40 年忌)

平成元年 (45 年忌) 平成 6 年 (50 年忌) *平成 17 年 (60 年忌)

昭和 54 年

十六地蔵 奉賛会 設立 (16 人の慰霊と世界平和を希う)

昭和 59 年

十六地蔵 供養会 設立 (奉賛会から改称)

昭和 63 年

「十六地蔵物語」 — 戦争で犠牲になった子どもたち — 出版

著者：原田一美 先生 出版：文研出版

平成 6 年

ビデオ 「十六地蔵物語」制作、原作

企画：(財)大阪国際平和センター、原作：原田一生先生 「十六地蔵物語」、制作：読売映画社

平成 14 年 11 月 1 日

南恩加島小学校 全教諭来山、供養の式典、法要の執行

平成 15 年 1 月 29 日

南恩加島小学校 十六地蔵モニュメント 完成除幕式

平成 15 年 5 月～6 月

貞光小学校と南恩加島小学校との修学旅行の交流開始

平成 17 年 1 月 29 日

「おかしいやんか」発行 著作：原田一美先生 出版：未知谷

平成 17 年 2 月 11 日

南恩加島小学校から、銅鐸を真光寺に奉納（白川洋二先生）

平成 17 年 1 月

貞光幼稚園園児の回り踊りの供養が数年続く。

平成 18 年 6 月

南恩加島小学校 修学旅行研修にて真光寺訪問。回り踊りの供養が数年継続される。真光寺への訪問毎年実施。

平成 24 年 9 月 15 日

講演会・シンポジウム 「あなたは十六地蔵の悲劇を知っていますか」 大阪で開催

主催：ピース大阪 協賛：国民学校と学童疎開を考える会 代表 奥村誠一氏

平成 27 年 1 月 29 日

戦後 70 年の平和の祈念碑 除幕式（供養会）

<後記>

昭和 20 年以来現在まで、供養が継承されています。今後も細くても長く供養を継承します。

十六地蔵尊への供養の千羽鶴を掲げる、小さなかawaii紅葉の様な手が未来の平和を祈ります。

お寺では 16 人の位牌を建立。時々参拝に来られる方々に史実を語ります。

十六地蔵尊をご縁に、新しい出会いも生まれ、その時、ふと 16 人の成長を感じます。